

# 学習上・行動上に困難のあるLD児の個別教育計画

—ことばの教室と通常学級、家庭、地域の連動を求める—

水木加良子\*・川間健之介\*\*

Individualized Educational Program for a Child with Learning Disabilities

Kayoko MIZUKI and Ken-nosuke KAWAMA

(Received December, 1997)

キーワード：個別教育計画、学習障害、課題関連図、ことばの教室

## I. はじめに

近年、学習障害児及びこれに類する学習上の困難がある児童・生徒に対する教育的対応についての関心が高まりつつある。国立特殊教育研究所では、平成3年から4年間に渡り「教科学習に特異な困難を示す児童・生徒の類型化と指導法の研究」を実施した。この調査研究から現在、通常学級に在籍する児童・生徒が受けることのできる特別な援助は、主に学級担任が授業以外の時間を使って行う個別指導と通級による指導であった。また学校の実情に合わせた様々な工夫がされている報告もあった。

ここでは学習上・行動上の困難をもつ学習障害児であるA児の事例を取り上げ、個別教育計画作成を通してその指導・援助のあり方を検討していく。A児は週1単位時間をことばの教室で学習し、それ以外の時間を通常学級で過ごしている。そこで通級という限られた時間の中で、どのような有効な指導を実施していくか、そして通常学級とことばの教室との間でその指導内容・方法のつながりをどうとっていくか、家庭・地域とのつながりをどうとっていくかを検討していくことが必要である。未だ学習障害児に対する理解、援助が十分ではない現状下であるので、今回はことばの教室担当者が全体をコーディネートする立場に立つ。そしてA児の学習上のつまづきと行動面の援助に対する通常学級、家庭、地域、ことばの教室が連動した効果的な指導システムと指導プログラムのあり方を個別教育計画を通して検討していく。

## II. 個別教育計画作成の留意点

・子どもの希望を計画に生かしていく。

子どもの困難とする部分にだけ焦点をあてるのではなく、興味・関心を伸ばし、得意なことや好きなことを見つけ、子どもの可能性を伸ばしていくという視点から考える。

・指導の継続性を保つ。

指導の継続を保つためには、通常学級、家庭、ことばの教室と連動した個別教育計画の

---

\*下松市立下松小学校 \*\*山口大学教育学部

作成と活用を進めるとともに、担任や担当者が代わった時は、前任者が立案した個別教育計画を活用していくことが有効ではないかと考える。

- ・通常学級、家庭、ことばの教室が運動した組織的な教育計画を作成する。
- ・保護者・通常学級担任・本児を含む多面的な情報やニーズの収集と整理を行う。

情報収集の方法としては、従来からの方法に改善を加えた3つの方法を考える。1つ目は知能検査、発達検査から発達レベルを評価する。2つ目は学力検査や観察による達成度の評価に「KJ法による課題関連図」の作成を加える。3つ目は保護者や通常学級担任のニーズの把握、本児の希望等環境全体からのアセスメント（診断）を実施する。

- ・通常学級、家庭、地域、ことばの教室の有効な協力体制を考える。
- ・個別教育計画を活用した日々の評価と定期的な評価、計画の修正を実施する。

### Ⅲ. A児の個別教育計画の作成

#### 1 A児の個別教育計画の作成手順（図1）

#### 2 A児の個別教育計画の作成の実際

##### ① 実態把握

ア 生育歴からの情報収集

イ 心理検査と学力検査、学習状況

ウ 行動観察

エ 本児のニーズの把握

本児のニーズは保護者、通常学級担任、ことばの教室担当者が代弁する。本児のニーズは計画を展開していくなかで柔軟に引き出していく。

オ 保護者のニーズの把握

「KJ法による課題関連図」（図2）で本児の課題がおおまかに4項目にリストアップされる。そこでこの項目を基準に4領域ごとに、保護者にニーズを記入してもらう。優先順位をつけられるものをつけてもらい、その者の願いを踏まえ、子どもにつけたい力を記入する。

カ 通常学級担任・ことばの教室担当者のニーズの把握（表1 個別教育計画）

子どもの実態把握と「KJ法による課題関連図」、保護者の願いを踏まえ、子どもにつけさせたい力を記入する。

キ 実態把握から考察されるA児の認知の偏り

書字・作文：視覚的な構成力の弱さ、視覚－運動統合の遅れ、会話力の遅れ

会話：社会的認知（場の雰囲気や流れがつかみにくい。自分が相手からどう思われているのか察することが苦手）、音量調節、統語

絵画、工作：視覚的な構成力の弱さ、視覚－運動統合の遅れ、失敗経験の積み重ねによると思われる。

運動・行動面の困難：運動能力（微細・粗大・運動統合）社会的認知、注意集中

##### ② 個別指導目標の仮設定（②～④は「個別教育計画」）

ア 長期目標の仮設定

長期目標は1年間を目安にことばの教室担当者が仮設定する。まず上記のそれぞれのニーズを一覧にし、そのニーズ表と本児の実態を対比して長期目標を絞り込む。

イ 短期目標の仮決定

短期目標は、学期を目安にことばの教室担当者が仮設定する。短期目標は長期目標を達成するための具体的、かつ比較的容易な目標にする。上記のニーズ一覧表の中から、短期目標に移行できるものは移行し、それ以外の短期目標については、本児の実態から達成できる具体的な内容を考える。「KJ法による課題関連図」作成を通して百数十枚のカードによる本児の多面的で詳細な実態の理解ができているので参考にする。通常学級担任や保護者から本児の1つ1つの活動レベルを確認しているのを参考にする。

③ 短期目標を指導の場、指導教科、指導内容・指導時間に仮に振り分ける。

④ 指導目標、指導の場、指導教科、指導内容・指導時間の決定のための協議

ことばの教室担当者が単独で仮決定した長期目標、短期目標、指導の場への振り分け、指導教科、指導内容・指導時間を通常学級担任、保護者に個々に提示し協議し、決定していく。

⑤ 指導の場ごとの個別指導計画作成

ア 「通常学級での個別指導計画表」(表2)

イ 「家庭・地域での課題と配慮事項一覧表」(表3)

ウ 「ことばの教室の個別指導計画表」の作成(表4)

⑥ ミーティングの実施

個別教育計画がほぼ完成したら通常学級担任、保護者、ことばの教室担当者が一堂に会して検討、調節をする。これまでの段階では個々に連携し、作成してきた計画を全体の場に提示し、3者で実現の可能性を検討、調整、修正していく。

### 3 個別教育計画の評価の視点、方法

① 通常学級、家庭、地域、ことばの教室それぞれの場での評価方法、評価の視点

評価の方法としては、1回または毎日の指導を記録する日々の評価と単元や期末、年度末の定期的な評価がある。定期的な評価では、それぞれの場で学期ごとに記述式で成果や変化を記述していく。ただしことばの教室では、前述の方法以外に指導プログラムごとに評価基準を設け、5段階で達成度を評価していく評価基準表を併用する。これは指導内容を構造化する点、記述式による評価で生じやすい曖昧さを回避する点で有効であると考えた。逆に記述式の評価は、その時々微妙な変化が表現しやすい点、所見が記述できる点が優れていると考える。

② 評価の報告・修正

学期ごとに各々の場で評価された時点で3者でミーティングを実施し、評価の報告、検討、修正を行う。評価は指導による本児の成果や変化と個別教育計画に対する評価の2面がある。

## IV. まとめと今後の課題

この個別教育計画は現在活用中であるので、現段階での課題について考察していく。まず個別教育計画作成以前のことを筆者の経験から振り返ってみる。それは、子どもに対する保護者の実態把握と担任、担当者の実態把握にずれがあったり、また保護者のニーズがなかなかでてこなかったり、通常学級での本児の行動面や対人面での実態把握が難しい面があったりした。また、教育の場でのインフォームド・コンセント(保護者への丁寧な説明と同意)が必要ではないかと思ってきたが、今までは具体的にどのように進めたらよいのかが分からない部分が多かった。しかしこの個別教育計画作成を通して、本児の

具体的な事実をもとに情報交換をするなかで本児の全体を通した現状や課題相互の関連が明らかになった。また個々のニーズを互いに理解し合うことができた。本児と関わる者が、必要な情報を共有化し、互いの本児に寄せる思いや願いを理解していくことができた。そして保護者の希望や優先性を反映し、具体的な目標、指導内容、方法、予想される成果を保護者に説明し、同意を得ることができた。

従来、ことばの教室では、通常学級担任や保護者、或いは関係機関との緊密なコミュニケーションをどう充実させるかが求められてきた。今回、「KJ法による課題関連図」の作成やミーティング、計画作成全体を通して、3者の話し合いの持ち方や情報交換のあり方を今までとは別の方面から検討することができた。

言い換えれば、子どもの実態を共有し、変容を追う視点、場面を焦点化したことにより、何をどう協力すればよいのかが明確になったということである。以下に現段階での課題を考察した。

### 1 個別教育計画作成の方法と様式を検討する。

- ① 効率的な作成手順と活用しやすい形式
- ② 目標設定のあり方・ミーティングの時期
- ③ 評価のあり方

### 2 学校の実情に合わせた支援体制作りを進める。

全職員が共通理解した上で子どもの個に応じた校内支援体制を整えていくことが急務である。

### 3 教科学習に特異な困難を示す子どもに有効な指導プログラム作成と活用を探る。

- ① 子どもの特異な学習のつまずきを的確に把握するための工夫と努力
- ② 子どもの認知（情報処理）特性を考慮した教材の選択や教示の工夫

#### 参考文献

- ①上野一彦・大石敬子他「第4回・LD指導者のためのワークショップ資料集」1996
- ②国立特殊教育研究所「心身障害児の個別指導方法に関する実証的研究」1996
- ③国立特殊教育研究所「教科学習に特異な困難を示す児童・生徒の類型化と指導法の研究」1996
- ④東京都教育庁指導課「平成7年度心身障害教育教育開発指導資料集」1996
- ⑤安田生命社会事業団「個別教育計画の理念と実践」1995
- ⑥「実践障害児教育1月号個別教育計画のすすめ」学研 1995
- ⑦「実践障害児教育1月号個別教育計画の進め方」学研 1997
- ⑧三浦祐一「児童・生徒の問題状況の総合的把握のための一方法」特殊教育臨床研究第1巻 1996
  
- ⑨森田安德・山口俊郎「学習障害児の読み書き検査作成の試み①」児童青年精神医学とその近接領域 34⑤ 1993
- ⑩松田素子「発達障害への発達検査の利用」発達障害研究 第16巻第4号 1995
- ⑪中野良顕「学習障害児の指導プログラム」児童青年精神医学とその近接領域 34⑤ 1993
- ⑫上野一彦「学習障害（LD）の理解をめぐる今日的課題」児童青年精神医学とその近接領域 34⑤ 1993
- ⑬大塚玲「学習障害の定義に関する諸問題と今後の課題」特殊教育学研究 30⑤ 1993

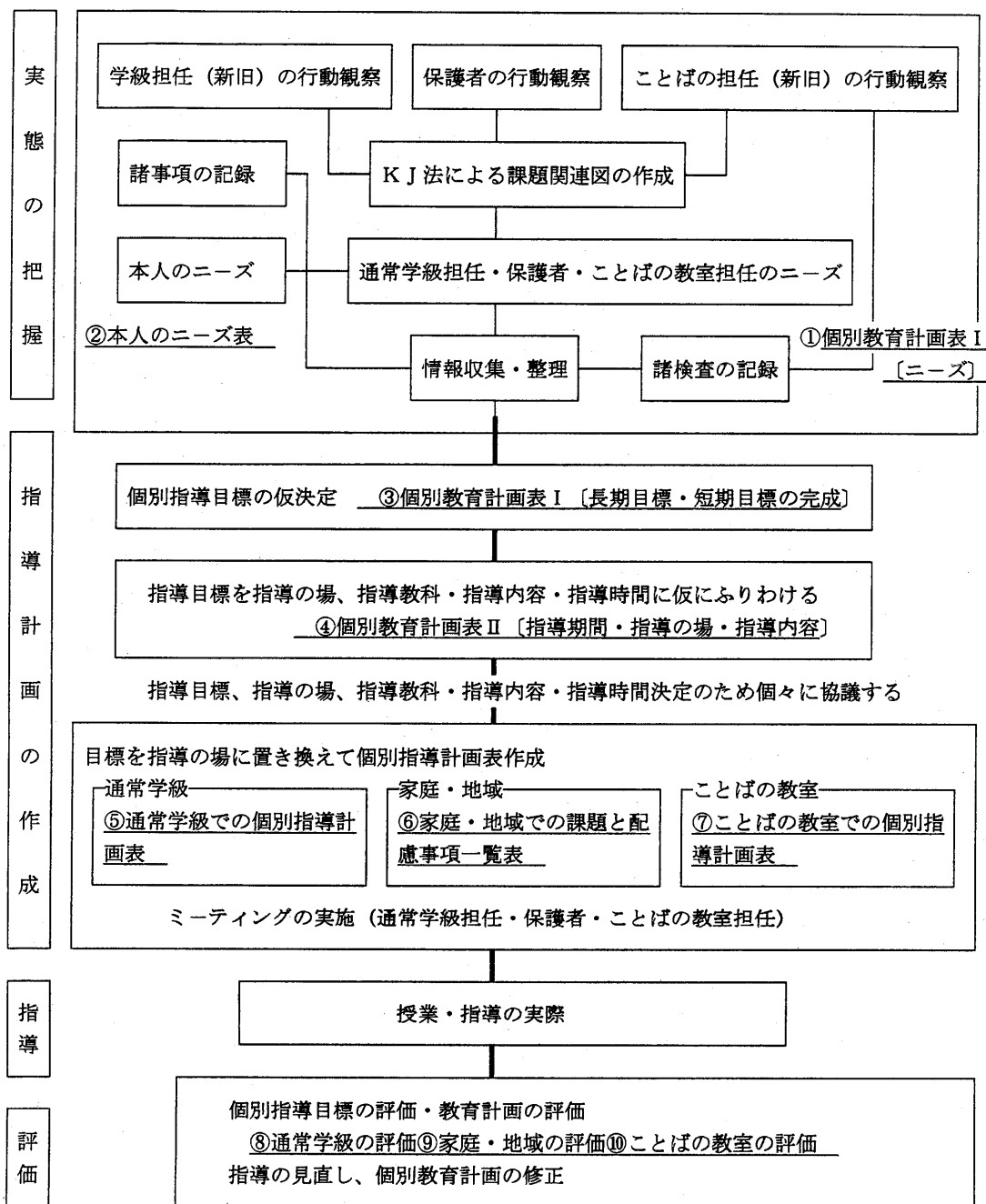


図1 個別教育計画作成の手順と方法

図2 A児の課題関連図

